

たばこの煙の中に最近有名になったダイオキシン（内分泌攪乱物質）が含まれていることが、わが国の金沢大薬学部の早川和一教授らの研究で明らかになっています。この研究はたばこの煙が雌マウスの女性ホルモン作用を阻害することから確認されました。そして吸う煙（主流煙）よりも、くゆらす煙（副流煙）の方がその量の多いことも判りました。

1962年、レイチェル・カーソン女史がその著書「沈黙の春」の中で、化学物質の汚染が生物に甚大な悪影響を与えることを警告し、更に約30年後、シーア・コルホーン等が「奪われた未来」なる本を発行し、環境に蔓延している合成化学物質には生体の内分泌を攪乱するホルモン様作用があり、人類、あらゆる生物にとってその未来を奪われる危険性があるとして、警鐘を鳴らしました。

たばこ等にどのようにしてダイオキシンが含まれるようになったかは定かではありませんが、たばこ栽培に使われた農薬かたばこ葉を乾かすために燃やされた木材の煙の中にダイオキシン

があったか、何れかと思います。

更にフィルター付たばこではフィルターがプラスチック製品であるために、その中に含まれている可能性もあります。フィルターはそのままでは消滅しないので、焼却することになりますと、更にダイオキシンが大気中に飛散することになります。ダイオキシンは表の如く色々な生体毒作用をもっており、特に男性の精子数の減少、母乳より乳児への移行は人間社会におそろしい未来を招くことになります。

最近では単位  $m^3$  の中のダイオキシン濃度が産業廃棄物燃焼よりもたばこ煙の方が断然多いことも証明されています。

### 表

ダイオキシンで惹き起こされる疑いのある生体毒作用

- 精子数の減少、停留率丸
- 女性子宮内膜症、不妊症
- 女性乳がん
- 流産、早産、新生児の死亡
- 小児成長・発育障害 など

岩 森 茂